各　　位

2024 年 10 月 16 日
株式会社 山と溪谷社
https://www.yamakei.co.jp/

人間と熊の果てなき死闘を描いた傑作ノンフィクション『羆吼ゆる山』発刊！

インプレスグループで山岳・自然分野のメディア事業を手がける株式会社山と溪谷社（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：二宮宏文）は、ヤマケイ文庫『羆吼ゆる山』（今野保：著）を発刊いたしました。

直木賞受賞作家（『ともぐい』）河﨑秋子氏、推薦！

「眼前わずか三十センチほどのところに、らんらんと光る目と開いた真っ赤な口、白い牙があった。ウオーッと一声吼えて、その牙が目に突き刺さるように迫り、なま温かい息が顔をなぜた。」

“赤毛”“銀毛”と呼ばれ恐れられた巨熊
熊撃ち名人と刺し違え、命を奪った手負い熊
アイヌ伝説の老猟師と心通わせた“金毛”
夜な夜な馬の亡き骸を喰いにくる大きな牡熊

熊ニモ負ケズ――戦前の日高山脈、羆の気配を身近に感じ暮らしていた人間と熊との死闘の物語が鮮やかによみがえります。

庭の片隅に寝床を作り、そっと寝かせてから、叔母とフミがつくった餌を与えてみた。アンコはピチャピチャと舌で少し舐めただけであった。

そして翌日、薬を持ってもう一度手当てをしてやるつもりで行った私の手や、叔母やフミの手を舐めていたアンコは、昼近くになって、キューンと一声、細い声で鳴きながら、ついに息を引きとってしまった。

9　対　決

北の春はまたたくまに過ぎ、その跡を襲うように夏がやってきた。毎年この時季になると、私たちは父と母を中心に親戚の者を加えて数名で、染退川（現在の静内川の旧称）のメナシベツ（東の川）を訪れ、二十日間ほどそこの山小屋に寝泊りしてキャンプ生活や渓流釣りを心ゆくまで楽しんだものであった。

その年も六月末から七月の下旬までメナシベツで過ごし、焼き干した沢山のヤマ

べ（ヤマメ）を背負って帰途についた。ところが、家に戻ってみると、愛馬・開運号が急な病いで倒れていた。獣医に診てもらい、手当てもしてもらったのだが、すでに高齢であったため、開運号はそれから間もなく不帰の客となった。

永い間よく働いてくれた馬であった。家族の話し合いで、いつでも立ち寄って花を供えられるよう墓は家に近いところがいいだろう、ということになり、二百メートルほど離れた三号の沢の入口近くの山裾に、大きな穴を掘って亡き骸を埋め、手厚く葬ってやった。

それは、埋葬してから三日目の朝のことであった。塩や水を持って行ってみると、墓が掘り返され、開運号の下腹のあたりが無残にも喰い破られていた。掘り出された土の上に、大きな熊の足跡が印されていた。

その足跡を目にしたとき、私は、去年の秋に椎茸採りに行って出会った熊や、松江が見たという熊、そしてその後幾度か二号の窯から三号の窯の辺りに姿を見せていた熊のことを思い出し、はっと息を呑んだ。それらは別々の熊ではなく、まさにこの大きな足跡を残した一頭の熊に違いない。その直感が確信に近いものとなるにつれ、全身に熱いものが滾り、力がみなぎってくるのを覚えた。

掘り返された穴をそのままにして、私はいったん家に戻り、鉈や鋸を用意してそこに引き返し、穴から十メートルほど離れた平地に立つ、やや太目のクチグロの木に登った。その木は、三の枝から上は車枝が四方に張り出していて、少し手を入れただけで恰好の待ち場ができ上がった。

私はさらに邪魔な下枝や小枝を鉈で払い落とし、弾道の見通しをよくしてから家に帰った。そして日が暮れるのを待った。

父は昨日の朝から、函館、札幌、小樽、苫小牧などの木炭問屋を回ってくると言って出かけていった。あと三日は、帰ってこないだろう。

熊は必ず、また亡き骸を喰いにくる。今夜、必ず。撃つとすれば、その機を逸してはならない――。夜の待ち場に上るのは初めてで、言いようのない不安が胸を浸していたが、私は今夜こそ一対一で熊と対決をしようと腑を固めた。

夕暮れとともに支度をして、外に出た。曇り空の一角に残照が仄見えているが、陽はとうに山陰に沈み、クチグロの木のある山裾には早くも宵闇が迫っていた。私は素早く待ち場に上ると、水を入れたビンや握り飯の包みを傍らの枝に吊るし、足場をしっかりと定め、坐る場所を楽にして、すべての準備をととのえた。銃は、使

い馴れたグリナーの二十四番ではなく、ウインチェスター四〇一のライフル自動五連銃を持ち込んだ。このライフル銃は、重量が六キログラムもあって、ずっしりと重いが、それだけに発射反動は少なく、連射時の銃身のブレもないので、命中率が高い。この自重の重さと、入弾孔の小さいのに比して出弾孔のあまりにも大きいことの二点を除けば、それはきわめて強力な、申し分のない銃であった。

やがて日はとっぷりと暮れ、山際の雑木林に夜のとばりが下りた。見上げる空には星ひとつなく、見下ろす地上は、ほんの十メートル先の穴がまったく見えぬほどに漆黒の闇に覆われた。

山裾に滞る空気が湿りをおびてきた。暗い夜空から今にも一雨きそうな気配が漂っている。〝雨が降るようなら、引きあげよう。でも、家が近いから降りだしてからでも遅くはないか〟などと思いわずらうち、今度は尻が痛くなってきた。

待ち場に上ったのは去年の秋以来、二度目であった。覚悟は、むろんできていた。だが周りの見えない夜の待ち場は、昼日中のそれとはまるで違っていた。

とにかく、体を少しでも動かして音をたてたら、せっかく熊が近よってきても気づかれてしまう。そう思うと、よけい緊張が高まり、ひとりでに体が固くなってし

■内容

Ⅰ出会いと別れ　父は走った／舞茸採り／羆、馬を襲う／暗闇の音／血の跡／仔連れの羆／涙の川
Ⅱ撃つ　少年猟師／待ち伏せ／手負い熊／横取り／追跡／山の神様／窮地脱出／猟犬、帰らず／対決
Ⅲアイヌの猟師　金毛／風雪／猟師
Ⅳ流転　暗い春／睨み合い／炭鉱の熊騒動／離散／熊ニモ負ケズ

解説　河﨑秋子

■著者略歴

今野保（こんの・たもつ）
1917年、北海道早来町生まれ。奥地での製炭業を経て、1937年から26年間炭鉱に勤務。その後、室蘭にて土木会社を設立。1984年に事故で右手を負傷するが、入院中に左手で文字を書く練習を行い、

その後、執筆活動を始める。著書に『渓流の想い出』『染退川追憶』（以上、私家版）、『アラシ―奥地に生きた犬と人間の物語』『羆吼ゆる山』『秘境釣行記』がある。2000 年、逝去。

■書誌データ
書名：ヤマケイ文庫『羆吼ゆる山』
著者：今野保
発売日：2024 年 10 月 16 日
定価：1210 円（本体 1100 円＋税 10%）
352 ページ／文庫判／１色刷
https://www.yamakei.co.jp/products/2824050030.html

【山と溪谷社】　https://www.yamakei.co.jp/
1930 年創業。月刊誌『山と溪谷』を中心とした山岳・自然科学・アウトドア・ライフスタイル・健康関連の出版事業のほか、ネットメディア・サービスを展開しています。
さらに、登山やアウトドアをテーマに、企業や自治体と共に地域の活性化をめざすソリューション事業にも取り組んでいます。

【インプレスグループ】　https://www.impressholdings.com/
株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：松本大輔、証券コード：東証スタンダード市場 9479）を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。
さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】
株式会社山と溪谷社　担当：綿
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町 1-105 神保町三井ビルディング
TEL03-6744-1900　E-mail: info@yamakei.co.jp
https://www.yamakei.co.jp/